幼年教育研究年報　第37巻　91－98
The Annual Research on Early Childhood, 2015

青年期における居場所意識とレジリエンスとの関連
― 女子大学生を対象とした検討 ―

芝﨑　美和[1]・吉村　淳子[1]

Resilience and a Sense of Ibasho in adulthood:
A study to female college subjects

Miwa SHIBASAKI[1], Junko YOSHIMURA[1]

Abstract: This study examined whether comprehension of “ibasho” (a Japanese term describing a sense of belonging) had a causal influence on the resilience of female college students. We viewed “ibasho” from two perspectives, “sense of authenticity” and “sense of self-usefulness,” and examined the relationships between these two elements of “ibasho” and positive emotions with family, college friends, and friends outside college that influenced the resilience of the subjects. The results indicated that female college students had a sense of authenticity and self-usefulness, as well as positive emotions in all their relationships. In relationships with college friends, sense of authenticity had the most positive effect on resilience and psychological function in “ibasho.” Sense of authenticity enhanced resilience, especially in relationships with college friends. There was also a correlation between sense of self-usefulness and positive future orientation in relationships with friends outside college. In family relationships, neither sense of authenticity nor sense of self-usefulness was related to resilience. Furthermore, positive emotions with college friends played a critical role in enhancement of resilience.

Key words: Ibasho, Authenticity, Self-usefulness, family, friends, female college student

目　的

心理的レジリエンスは，困窮状態から立ち直り，それに打ち勝つ能力と，ストレス状況への柔軟な適応によって特徴付けられる心理的特性である（Block & Block, 1980; Block & Kremen, 1996）。レジリエンスの高い者は，興味旺盛で，ポジティブな感情を示しやすく，気持ちをリラックスさせる方法を知っている（Block & Kremen, 1996; Klohnen, 1996; Demos, 1989; Wolin & Wolin, 1993）。また，楽観的思考の持ち主でもあり，ポジティブ感情を方略的に引き出すことによって，ポジティブな情動性を育み，養ってきた者でもある（Kumpfer, 1999）。

このポジティブな情動性が，レジリエンスの重要なエレメントであるとの指摘は多い。ポジティブ感情は，思考や問題解決における柔軟性を促進し（Fredrickson & Branigan, 2005），適応コーピングを容易にすることが知られている（Folkman & Moskowitz, 2000a, 2004）。さらに，ネガティブな感情の心理的効果を弱め，心理的well-being を高めるとされている（Fredrickson, 2000; Fredrickson & Levenson, 1998; Ong & Allaire, 2005）。ポジティブ感情を引き出すコーピングには, 意識的にポジティブな賞賛を行う，ストレス状況の中から自分に役立つことを見つける，ユーモアを多用するなどがあり（e.g., Affleck & Tennen, 1996; Folkman & Moskowitz, 2000b; Billings, Folkman, Acree, & Moskowitz, 2000），レジリエンスの高い者ほどこのようなコーピングを多く用いる傾向にある。

日常の中でいかにポジティブ感情を認識する

1　新見公立短期大学

かは，青年期の場合，所属する集団や対人関係に依存する。とりわけ大学生の場合，家族や旧友の元を離れ，新規環境で自ら新たな関係性を構築し，学習，遊び，生活のほとんどがその関係性の中で組み立てられていくため，日常における感情は，友人関係の捉えと強く相関すると思われる。一方，アパシー傾向が強く母親と密着した関係にある女子大学生は学習意欲が低い（鉄島，1993），との指摘に見られるように，大学生活における意欲，態度，そしてそこで生じる感情には家族との関係性が少なからず影響する。つまり，青年期における心理的レジリエンスの強さは，家族や友人といった所属集団に対する捉え方や，そこで生起するポジティブ感情の強度と関連すると思われる。

他者との関係という視点から青年期のレジリエンスを捉える場合，「居場所」という概念が有用となろう。居場所に関しては，「学校が児童生徒にとって自己の存在を実感でき，精神的に安定していることのできる場所（「心の居場所」）としての役割を果たすことが必要である（文部省, 1992）」という見方に基づき，主に小・中・高校生を対象とした実証研究が行われてきている。居場所は，自己受容感，自己肯定感，自己存在感，安定感などを実感させてくれる場所である（住田，2003）。学校生活が楽しく有意義なものになるかは，学校生活における人間関係に居場所を見出せるかに強く依存する（藤井，2003）。したがって，児童生徒の居場所形成を積極的に促すような環境構成が学校現場には求められてきた。特に，主観的条件と客観的条件という居場所を構成する２つの条件のうち（住田，2003），居場所について自らが「居場所である」と認識し，そこに居場所としての意味を見出すという主観的条件は，こういった環境構成を考える上で重要なものとなる。居場所で心を休め，ポジティブな感情を抱くには，居場所が空間として確保されるだけではなく，自己を受容し，自分の存在を再確認できる場所でなければならない。

一方で，居場所意識には「ありのままでいられること」という本来感と「役立っていると思えること」という自己有用感で成り立っているとの見方もある（石本，2010）。石本（2010）は，中学生と大学生を対象に，家族と友人という２つの人間関係における本来感と自己有用感を測定，比較し，大学生の方が家族や友人の中で本来感，自己有用感を強く認識することを示した。このことは，居場所意識には発達的差異が存在し，居場所がある，他者の居場所になるという認識は年齢に伴い高まることを表している。

さらに石本（2010）は，青年期の自己肯定意識に対し，本来感と自己有用感は異なる影響力を持つことを示している。例えば，自己肯定意識の中の自己受容感に影響するのは友人本来感であり，自己実現的態度に関しては，大学生女子に限定すると，家族本来感が影響する。他方，自己有用感に関しては，恋人関係において生じるものが強い影響力を持ち，家族や友人にとって役立っているという認識は，自己肯定意識や学校生活享受感と関係しない。居場所意識を本来感と自己有用感に分けたという点で石本（2010）の示す知見は有用であるが，「友人」について，大学生活の多くを共有する「大学の友人」であるのか，「大学以外の友人」であるのかを区別していない点で課題を残している。特に，女子は男子に比べ対人関係を重視し（大久保，1999），自己開示や相互理解に基付く共感的な関係を望む（落合・佐藤，1996）ことから，日常的に多くの経験を共有する大学の友人に対しては，本来感だけでなく自己有用感を強く認識すると予測される。

以上のことから，本研究では青年期の居場所意識がレジリエンスに与える影響について，女子大学生を対象に検討する。居場所意識については石本（2010）を参考に，家族，大学の友人，大学以外の友人の各関係における本来感と自己有用感を扱う。さらに，居場所の心理的機能を６つの下位尺度によって捉えた杉本・庄司（2006）に倣い，居場所の機能的側面にも着目し，レジリエンスとの関連について詳細な検討を行う。また，家族や友人といる際のポジティブな感情がレジリエンスと関連するか否かについても検討を行うことで，居場所意識とレジリエンスとの関係性に，ポジティブ感情がどのように関わるかについて考察する。男子に比べ女子の方が対人関係に敏感であり，自己開示や共感的理解を求める関係を意識する（大久保，1999）ことから，日常的に接する機会の多い大学の友人は，家族や大学以外の友人よりもポジティブな感情を共有することが多く（仮説１），大学の友人との関係において生じる居場所意識は高いレジリエンスを予測するものであると推察される（仮説２）。さらに，ポジティブ感情はレジリエンスと強く関係することを示した先行研究を支持し（e.g., Fredrickson & Branigan, 2005;

Folkman & Moskowitz, 2000a)，大学の友人関係において生じるポジティブ感情は高いレジリエンスを予測すると考えられる（仮説３）。

現代の社会的問題の１つであるとされる大学生のスチューデントアパシーは，不登校や学校への不適応とも関連しており，居場所意識と少なからず関係すると思われる。大学生のレジリエンスが居場所意識によって支えられていることが示されれば，大学生の生きる力を育むための支援策を考案する上で重要な手がかりとなるであろう。

方　法

１．調査の概要

女子大学生100名を対象とし，無記名式の質問紙調査を行った。調査は集団的に実施され，所要時間は10分程度であった。なお，調査紙には，個人情報には配慮すること，調査は義務ではないこと，成績とは無関係であることを明記し，併せてこれらを口頭で伝えるなどの倫理的配慮を行った。

２．質問紙の構成

１）居場所意識：集団の中での本来感，自己有用感，ポジティブ感情

所属集団として,「家族」,「友人（大学)」,「友人（大学以外)」の３つを設定した。各集団の中で「居場所があると感じるか（本来感)」,「居場所になっていると感じるか(自己有用感)」「楽しいと感じるか（ポジティブ感情)」について「１．まったく感じない（１点)」,「２．あまり感じない(２点)」,「３. どちらでもない(３点)」,「４．やや感じる（４点)」,「５．とても感じる（５点)」の５件法で回答を求めた。

２）居場所の心理的機能

35項目で構成された居場所の心理的機能尺度（杉本・庄司，2006）を使用した。各項目に対して,「１．ぜんぜんあてはまらない（１点)」,「２．あまりあてはまらない（２点)」,「ややあてはまる（３点)」,「４．とてもよくあてはまる（４点)」の４件法で回答を求めた。

３）レジリエンス

小塩（2002）の精神回復力尺度はレジリエンス尺度として幅広く使用されている。そこで，本研究でも21項目から成るこの尺度をレジリエンス尺度として使用した。各項目について,「１．いいえ（１点)」,「２．どちらかというといいえ(２点)」,「３．どちらでもない(３点)」,「４．どちらかというとはい（４点)」,「５．はい（５点)」の５件法で回答を求めた。

結　果

１．居場所意識－本来感，自己有用感

「居場所がある」という意識（以下，本来感）に関する質問に対して,「５．とても感じる」,「４．やや感じる」と回答したものを「本来感あり」,「２．あまり感じない」,「１．まったく感じない」と回答したものを「本来感なし」とし,「どちらでもない」を合わせ，回答を３つに分類した。「他者の居場所となっている」意識（以下，自己有用感）についての質問に対する回答に関しても同様の処理を行い, 回答を「自己有用感あり」「どちらでもない」「自己有用感なし」の３つに分けた。

家族，大学の友人，大学以外の友人との関係の中で本来感と自己有用感を感じるかについて，所属集団別に x^2検定を行った。その結果，本来感については, 家族, 友人（大学), 友人（大学以外）のいずれにおいても有意な人数の偏りが見られ（家族:$x^2(2) = 149.68, p < .01$, 友人（大学）:$x^2(2) = 124.89, p < .01$，友人（大学以外）:$x^2(2) = 163.65,\ p < .01$)，残差分析の結果，すべての所属集団において,「本来感なし」「どちらでもない」の回答よりも「本来感あり」の回答が有意に多かった。

自己有用感についても，家族，友人（大学)，友人（大学以外）のすべてで有意な人数の偏り

Table 1　家族，友人（大学)，友人（大学以外）との関係性における居場所意識とポジティブ感情（人）

	本来感			自己有用感			ポジティブ感情		
	あり	どちらでもない	なし	あり	どちらでもない	なし	あり	どちらでもない	なし
家族	91(91.0)	4(4.0)	5(5.0)	74(74.7)	20(20.2)	5(5.1)	90(90.0)	8(8.0)	2(2.0)
友人（大学）	86(86.0)	6(6.0)	8(8.0)	63(63.6)	25(25.3)	11(11.1)	91(91.0)	4(4.0)	5(5.0)
友人（大学以外）	93(93.9)	3(3.0)	3(3.0)	72(72.7)	21(21.2)	6(6.1)	95(96.9)	0(0.0)	3(3.1)

（　）内は％

が見られた（家族：$x^2(2) = 79.83, p < .01$, 友人（大学）：$x^2(2) = 43.88, p < .01$，友人（大学以外）：$x^2(2) = 72.55, p < .01$）。残差分析の結果，いずれの集団においても，「自己有用感なし」より「どちらでもない」，「どちらでもない」より「自己有用感あり」の回答が有意に多かった（Table 1）。

２．家族，友人との関係性で生じるポジティブ感情

家族や友人といるときにポジティブな感情が生起する程度を質問し，「５．とても感じる」と「４．やや感じる」の回答を「ポジティブ感情あり」，「２．あまり感じない」と「１．まったく感じない」の回答を「ポジティブ感情なし」とし，「どちらでもない」を合わせ，回答を３つに分類した。ポジティブ感情の有無についての回答に有意な人数の偏りが見られるか否かについて集団別に x^2 検定を行ったところ，すべての集団において有意な人数の偏りが得られた（家族：$x^2(2) = 145.06, p < .01$，友人（大学）：$x^2(2) = 149.68, p < .01$，友人（大学以外）：$x^2(2) = 178.57, p < .01$）。残差分析の結果，すべての所属集団において，「ポジティブ感情なし」「どちらでもない」の回答より「ポジティブ感情あり」の回答が有意に多かった（Table 1）。

３．居場所の心理的機能

杉山・庄司（2006）に基づき，居場所の心理的機能尺度を「被受容感」，「精神的安定」，「行動の自由」，「思考・内省」，「自己肯定感」，「他者からの自由」という６つの下位尺度に分け，各下位尺度得点を算出した。レジリエンス尺度に関しては，小塩ら（2002）は因子負荷量の低さを理由に21項目中２項目を分析から除外し，「新規性追求」，「感情調整」，「未来志向」の３因子を抽出している。そこで，これら３つをレジリエンスの下位尺度として各下位尺度得点を算出した。本来感，自己有用感，ポジティブ感情に関しては，５件法によって得られた得点を本来感得点，自己有用感得点，ポジティブ感情得点として分析に使用した。

１）居場所意識との関連性

本来感・自己有用感が居場所の心理的機能とどのように関連するかを検討するために，居場所の心理的機能尺度の６つの下位尺度得点を目的変数，本来感・自己有用感の各得点を説明変数とし，ステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果，本来感（友人（大学））では「被受容感」，「精神的安定」，「行動の自由」への有意な正の β が確認され，自己有用感（友人（大学以外））の「被受容感」への正の β に有意傾向が見られた（Table 2）。したがって，日常的な接触頻度が高い友人との関係において「居場所がある」という認識は，「自分は一人ではなく，メンバーに大切にされている」という被受容感や，「無理をせず自分らしくいられる」「楽しい」などの精神的安定，「自分の好きなときに好きなことができる」といった行動の自由を予測するといえよう。また，日常的な交流はないが関係が持続している大学以外の友人関係での「友人の居場所になっている」という認識も，被受容感を予測するものであることが明らかになった。

２）ポジティブ感情との関連性

他者といるときの「楽しい」というポジティブな感情が居場所の心理的機能と関係するか否かについて，各ポジティブ感情得点を説明変数，居場所の心理的機能尺度の各下位尺度得点を目的変数として，ステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った（Table 3）。分析の結果，家族では「行動の自由」に対してのみ有意な正の β が得られたのに対し，友人（大学）では「思考・

Table 2 居場所意識（本来感・自己有用感）と居場所の心理的機能との関連

		居場所の心理的機能					
		被受容感	精神的安定	行動の自由	思考・内省	自己肯定感	他者からの自由
本来感	家族	−0.05	−0.09	0.12	0.19	−0.05	−0.00
	友人（大学）	0.39**	0.56**	0.25+	−0.07	0.21	−0.05
	友人（大学以外）	0.16	0.13	0.18	−0.06	0.18	0.09
自己有用感	家族	0.06	0.12	0.13	−0.18	0.14	−0.05
	友人（大学）	−0.14	−0.12	−0.14	0.01	−0.15	−0.02
	友人（大学以外）	0.26+	0.14	0.12	0.20	0.22	0.15
	(*df*)	(6,93)	(6,93)	(6,93)	(6,93)	(6,93)	(6,93)
	F 値	5.89**	9.01**	4.57**	0.57	3.39**	0.49
	R^2	0.23	0.33	0.18	−0.03	0.13	−0.03

値は標準偏回帰係数　　+.05 < *p* < .10　　**p < .01

Table 3 ポジティブ感情と居場所の心理的機能との関連

		居場所の心理的機能					
		被受容感	精神的安定	行動の自由	思考・内省	自己肯定感	他者からの自由
ポジティブ感情	家族	0.07	0.00	0.21*	0.07	0.09	0.08
	友人（大学）	0.44**	0.54**	0.18+	0.08	0.17+	−0.17+
	友人（大学以外）	0.14	0.17+	0.15	0.02	0.06	0.19+
	(*df*)	(3,96)	(3,96)	(3,96)	(3,96)	(3,96)	(3,96)
	F 値	12.15**	18.77**	5.92**	0.59	2.10	2.06
	R^2	0.25	0.35	0.13	−0.01	0.03	0.03

値は標準偏回帰係数　　+.05 < *p* < .10　　**p* < .05　　***p* < .01

Table 4 居場所意識（本来感・自己有用感）とレジリエンスとの関連

		レジリエンス		
		新規性追求	感情調整	肯定的な未来志向
本来感	家族	0.13	0.09	0.11
	友人（大学）	0.14	0.52**	0.35*
	友人（大学以外）	0.18	0.12	−0.10
自己有用感	家族	−0.14	0.08	0.06
	友人（大学）	0.10	−0.22	−0.09
	友人（大学以外）	0.09	0.08	0.29+
	(*df*)	(6,93)	(6,93)	(6,93)
	F 値	2.63*	6.51**	5.21**
	R^2	0.09	0.25	0.20

値は標準偏回帰係数　　+.05 < *p* < .10　　**p* < .05　　***p* < .01

内省」を除くすべてに対して有意な正の β が確認された。友人（大学以外）では,「精神的安定」と「他者からの自由」への正の β が有意であった。このことから，居場所の機能についての認識を支えているものは，家族や大学以外の友人以上に，日常的に接触のある大学の友人であることがうかがえる。

4．居場所意識とレジリエンス

1）本来感・自己有用感とレジリエンスとの関連性

本来感・自己有用感とレジリエンスとの関連性を検討するため，レジリエンス尺度の３つの下位尺度得点を目的変数，６つの本来感得点（家族，友人（大学），友人以外（大学以外））と自己有用感得点（家族，友人（大学），友人（大学以外））を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。標準偏回帰係数 β に着目すると，本来感（友人（大学））は「感情調整」と「肯定的な未来志向」で有意な正の β を示しており（Table 4），大学の友人関係における本来感は，レジリエンスの中でも感情のコントロールや明るい未来の展望を予測することが示された。また，自己有用感（友人（大学以外））は「肯定的な未来志向」で有意な正の β を示したことから，大学以外の友人の居場所になっているという意識は未来への前向きな姿勢を予測することが明らかになった。

Table 5 ポジティブ感情とレジリエンスとの関連

	レジリエンス		
	新規性追求	感情調整	肯定的な未来志向
家族	0.11	0.14	0.15
友人（大学）	0.23*	0.46**	0.36**
友人（大学以外）	0.05	0.09	−0.03
(*df*)	(3,96)	(3,96)	(3,96)
F 値	3.29*	14.00**	6.75**
R^2	0.06	0.28	0.15

値は標準偏回帰係数　　**p* < .05　　***p* < .01

2）ポジティブ感情とレジリエンスとの関連性

他者といるときのポジティブ感情がレジリエンスと関係するかを明らかにするために，レジリエンスの各下位尺度得点を目的変数，各ポジティブ感情得点を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った（Table 5）。分析の結果,「新規性追求」,「感情調整」,「肯定的な未来志向」のすべてにおいて，友人（大学）が有意な正の β を示した。このことから，日常的に接触する友人との関係においてポジティブな感情を抱くことは，高いレジリエンスを強く予測するといえる。

考　察

本研究の目的は，女子大学生の居場所意識がレジリエンスに与える影響について検討することであった。分析の結果，家族や大学以外の友人よりも大学の友人との関係において本来感と自己有用感という居場所意識やポジティブ感情が生じやすいであろうという予測に反し，家族，大学の友人，大学以外の友人のいずれにおいても女子大学生は本来感，自己有用感を認識し，ポジティブ感情を共有することが確認された。したがって，仮説１は支持されなかった。しかし，仮説２・３を支持し，大学の友人との関係において生じる居場所意識やポジティブ感情は，家族や大学以外の友人に比べて居場所の心理的機能やレジリエンスと強く関係することが示された。家族，大学の友人，大学以外の友人に関する結果について以下に考察する。

まず，家族に関しては，女子大学生は本来感や自己有用感を認識しており，関係性の中でポジティブ感情も生じていた。青年期では，親から友人，恋人にアタッチメント対象が移行するが（Hazan & Zeifman, 1994; 若尾，2001），親は依然，「ありのままでいられる」という本来感を認識できる対象であることがうかがえる。しかし，ポジティブ感情が居場所の心理的機能である「行動の自由」に影響することを除けば，家族との関係性の中で生じる本来感，自己有用感，ポジティブ感情は居場所の心理的機能やレジリエンスと関係していなかった。これらの結果は，大学生女子における家族本来感と自己実現的態度との関連性を示す石本（2010）と一致しない。安定した親子関係は肯定的な物事の見方や積極性と関連することは，これまでのレジリエンス研究でも確認されている（e.g., Werner & Smith, 1982）。家族との関係性における本来感や自己有用感が青年期の適応や精神的安定とどのように関係するかについてさらに詳細な検討が望まれる。

一方，大学の友人に関しては，女子大学生は，本来感や自己有用感という居場所意識を認識しており，ポジティブ感情も共有していた。居場所の心理的機能については，大学の友人関係における本来感によって，他者から受容され大切に思われていることを実感でき，満足感や安心感といった情緒の安定を確保でき，行動を縛られることなく好きなことを自由にできると認識することが明らかにされた。石本（2010）は，大学生女子の友人本来感は自己受容や充実感に影響することを示しているが，本研究結果は，友人本来感がこれら自己肯定意識に加え，自己意識についての新たな側面に影響することを示すものであるといえよう。しかし，居場所の心理的機能に関しては，友人本来感以上に，友人との関係で生じるポジティブ感情が強く関係し，「思考・内省」を除くすべての機能との間で関連性が確認されており，このことから，友人との関係において本来感を持つこと以上に，友人との間でポジティブな感情を共有することが，居場所の機能を高めることに貢献すると思われる。

また，大学の友人については，本来感とポジティブ感情がレジリエンスに影響することも確認され，友人本来感は「感情調整」，「肯定的な未来志向」と，ポジティブ感情は「新規性追求」，「感情調整」，「肯定的な未来志向」というレジリエンスの３要素全てと関連していた。つまり，友人との関係において本来感とポジティブ感情を持つことは，新しいことへの興味関心を広げ，挑戦心を高める，ネガティブな感情を抑制したり上手く気分転換する，将来の目標に向けて見通しや前向きな姿勢を保つといったレジリエンスの向上を促すといえる。ポジティブ感情がレジリエンスの重要なエレメントであるという研究知見（e.g., Folkman & Moskowitz, 2000a, 2004; Fredrickson & Vevenson, 1998）に基づき，これらの結果を整理すると，大学の友人本来感はポジティブ感情を介してレジリエンスを高めているのではないかとの予測が立てられるが，この点については今後の検討課題である。

最後に，大学以外の友人については，家族や大学の友人と同様に，本来感，自己有用感，ポジティブ感情を認識する者が多かった。しかし，居場所の心理的機能やレジリエンスとの関連性をみてみると，影響が確認されたのは自己有用感のみであった。大学以外の友人との関係における自己有用感は，居場所の心理的機能の「被受容感」，レジリエンスの「肯定的な未来志向」に影響しており，他者に大切にされていると実感し，将来を明るく捉え，前向きな姿勢を保つことに貢献するといえる。大学以外の友人には，旧友の他，アルバイト，学外活動で得た友人などが含まれる。大学生になると，誰とでも仲良くしたいというつきあい方は減少し（落合・佐藤，1996），大学生活を円滑に営むために，好き嫌いに関わらず必然的に一定量のつきあいを保つ

必要がある大学の友人に比べ，大学以外の友人に対してはつきあいの程度を操作しやすい。大学生は友人と自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方を望んでおり（落合･佐藤，1996），対人関係に敏感である女子ではその傾向が顕著であると思われる。このような相互理解の関係において，友人の居場所となっているという自己有用感が，自分も友人に受け入れられ，大切に思われているという被受容感を生み，さらには将来の目標に向けて前向きな姿勢を保つ力の源となっているのであろう。

このように，女子大学生における居場所意識はレジリエンスに影響するが，家族，大学の友人，大学以外の友人という人間関係によって影響の仕方が異なることが示された。学校での「居場所のなさ」はスチューデントアパシーを強く予測することが知られている（石本・倉澤，2009）。大学との友人関係における居場所意識がレジリエンスと強く関係するという本研究結果を併せて考えると，女子大学生の修学およびキャリア支援を考えていくためには，「大学の友人」が重要なキーワードとなることがうかがえる。

最後に，本研究の課題を３点挙げる。第１に，本研究では家族との間で生じる居場所意識とレジリエンスとの関係性は示されなかった。安定した親子関係はレジリエンスと関連する（Werner & Smith, 1982）。Werner & Smith（1982）の研究知見と本研究結果を併せて考えると，親子関係が安定していることと，子が家族との関係の中で本来感や自己有用感を認識することは必ずしも同じ意味を持つわけではないといえる。第２に，本来感，自己有用感について詳細に検討する必要がある。例えば，石本（2010）は本来感と自己有用感について，それぞれ６項目，７項目から成る尺度を用い，学校適応との関連性を検討している。本来感，自己有用感について質的な検討を加えた上で，家族間での本来感，自己有用感との関係性を検討することによって，家族が青年のレジリエンスにどのように貢献しているかを明らかにすることができよう。第３に，大学の友人のどのような機能が青年のレジリエンスを支えているのかを検討する必要がある。大学の友人が青年のレジリエンスを支える仕組みは，物理的な距離の近さだけでは説明できない。また，ポジティブ感情についても，居場所意識とレジリエンスとの関係性を強化するかを含め，その心理的機能を明らかにすることも今後の検討課題である。さらに，居場所意識とレジリエンスについて高校大学間の連続性を検討することで，より包括的な支援の在り方がみえてくると期待される。

引用文献

Affleck, G., & Tennen, H. (1996). Construing benefits from adversity: Adaptational significance and dispositional underpinnings. *Journal of Personality,* **64**, 899-922.

Billings, D. W., Folkman, S., Acree, M., & Moskowitz, J. T. (2000). Coping and physical health during caregiving: The roles of positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology,* **79**, 131-142.

Block, J. H., & Block, J. (1980). The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior. In W. A. Collins (Ed.), *The Minnesota Symposia on Child Psychology* (Vol. 13, pp. 39-101). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Block, J., & Kremen, A. M. (1996). IQ and ego-resiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of Personality and Social Psychology,* **70**, 349-361.

Demos, EV. Resiliency in infancy. (1989). In: Dugan, TF.; Cole, R., (Eds.). *The child of our times: Studies in the development of resiliency.* Philadelphia: Brunner/Mazel, pp. 3-22.

Folkman, S., & Moskowitz, J. T. (2000a). Positive affect and the other side of coping. *American Psychologist,* **55**, 647-654.

Folkman, S., & Moskowitz, J. T. (2000b). Stress, positive emotion, and coping. *Current Directions in Psychological Science,* **9**, 115-118.

Folkman, S., & Moskowitz, J. T. (2004). Coping: Pitfalls and promise. *Annual Review of Psychology,* **55**, 745-774.

Fredrickson, B. L. (2000). Cultivating positive emotions to optimize health and well-being. *Prevention and Treatment,* **3**, 1-25..

Fredrickson, B. L., & Branigan, C. (2005). Positive emotions broaden the scope of attention and thought-action repertoires. *Cognition and Emotion,* **19**, 313-332.

Fredrickson, B. L., & Levenson, R. W. (1998). Positive emotions speed recovery from the cardiovascular sequelae of negative emotions. *Cognition and Emotion,* **12**, 191-220.

藤井美保（2003）.「居場所」としての学校と子どもの対人関係（住田正樹・南博文編子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会，229-248.

Hazan, C., & Zeifman, D. (1994). Sex and psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in Personal relationships:* Vol. 5 Attachment processes in adulthood. pp. 151-177. London: Jessica Kingsley.

石本雄真（2010）．青年期の居場所感が心理的適応，学校適応に与える影響．発達心理学研究，**21**，278-286.

石本雄真・倉澤知子（2009）．心の居場所とアパシー傾向との関連．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，**2**，11-16.

Klohnen, E. C. (1996). Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of Personality and Social Psychology,* **70**, 1067-1079.

Kumpfer, L. K. (1999). Factors and processes contributing to resilience: The resilience framework. In M. D. Glantz & J. L. Johnson (Eds), *Resilience and development: Positive life adaptations* (pp. 179-224). New York: Academic/Plenum.

文部省（1992）．登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の“心の居場所”づくりを目指して－．学校不適応対策調査研究協力者会議報告書.

Ong, A. D., & Allaire, J. C. (2005). Cardiovascular intraindividual variability in later life: The influence of social connectedness and positive emotions. *Psychology and Aging,* **20**, 476-485.

落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期における友達とのつきあい方の発達的変化．教育心理学研究，**44**，55-65.

大久保智生（1999）．心理的居場所に関する研究（1）－概念の検討と尺度の作成．第８回日本性格心理学会発表論文集，92.

小塩真司･中谷素之･金子一史･長峰伸治(2002)．ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性－精神的回復力尺度の作成－カウンセリング研究，**35**，57-65.

杉本希映・庄司一子（2006）.「居場所」の心理的機能の構造とその発達的変化．教育心理学研究，**54**，289-299.

住田正樹（2003）．子どもたちの「居場所」と対人的世界（住田正樹・南博文編子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会，3-17，101-168.

鉄島清毅（1993）．大学生のアパシー傾向に関する研究．教育心理学研究，**41**，200-208.

若尾良徳（2001）．青年期のアタッチメント対象は誰か？－安全基地現象の観点から．東京都立大学心理学研究，**11**，7-15.

Werner, E. E., & Smith, R. S. (1982). Vulnerable but invincible: A longitudinal study of resilient children and youth. New York: McGraw-Hill.

Wolin, S. J., & Wolin, S., (1993). *The Resilient Self.* New York: Villard Books.